

連載

# 怠ける／奮い立て、不要不急の徒よ

## 猫の後ろ姿からゾンビ的状况へ：DJ 風に（3）

川村 邦光

不要不急とか、自粛とか、巣籠りなんていう言葉がありました。宵闇のなか、金木犀の香りがそこかしこ漂っています。皆さん、つつがなくお過ごしでしたでしょうか。「会えなくなって初めて知った……」とせつなく歌われる「再会」を思い起こします。今宵、お届けする楽曲は「ミージアファドの女」(BMG ビクター、1995年)です。ファドはポルトガル・リスボンに生まれた歌、物悲しく哀調を湛えています。

私が初めてファドを聴いたのは、かの文化人類学者、山口昌男さんの運転する車のなかでした。亡くなってもう8年経ちます。私の実家のある会津田島から耶麻郡昭和村に行く道すがら、やおらCDをかけました。これはファドというものだ、聴いたことあるか、ないだろうなどと言いながら、ひとくさり講釈を垂れたように思いますが、忘れてしまいました。山口さんが聴かせてくれたのはアマリア・ロドリゲスのファドでした。1992年、30年近く前の夏のことです。この年、山口さんは昭和村の廃校、喰丸小学校を喰丸文化再学習センターと名付けて再生させました。どうしたわけで私がこの開所日に呼ばれたのか、経緯は忘れてしまいました。福島県の会津出身だということで、私ともう二人、それに山口さんとで座

談会めいたことをしましたが、中味は忘れていています。そして、この日、井上ひさしが来て話したように思います。

かつて山口さんは奈良の私の自宅に泊ったことがありました。あれはいつのことで、どういう経緯だったのか、これも思い出せません。ワインを土産に、恥じらいを籠めつつも、陽気に話しまくっていました。山口さんは1931年生まれ、存命なら90歳。今更ながらエライ先生だったと何やら懐かしくもあり、安穩とした我が身の不甲斐なさにやや呆れてしまいます。山口さんなら、コロナ禍の状況に対して、ペストやコレラ、スペイン風邪の流行と文化現象を引き合いに出し、祝祭なき世界に少しいらだちながら、シニカルな現状批判を華々しく展開したのではないかと想像してしまいます。

### 危機の言葉に向かう

古いも若きも、初めは自粛だ、巣籠りだと、否応ながらも対応していたが、次第に警戒感や緊張感が弛んでいき、8月あたりに緊急事態宣言が出されて、またかといった調子になったとは大方の言い方、もしくは雰囲気だったようです。他方では、若者たちが取り残されるのを恐れるかのよう

に、ワクチン接種に衝き動かされていた、あるいは後ろ指を指されて、せかされていたようです。こう言うのはなんですが、同調しやすく、従順で、批判的な構えがないように思われました。それは中高年も同じだったのです。少なからず危機的なものを感じ取っていたのでしょう。こうした勢いが危機的な心情を自ずと醸成していく情況を生み出していったのではないのでしょうか。そして、9月中旬前後から感染者は少なくなっていきました。だが、この間の情勢、それも千載一遇の世界的な事態として、記録的大雨のように、個々人が記録しておくに値しているのではないのでしょうか。

再びコロナ感染者が増大するかどうかは解りませんが、選挙や何やらで数多くの失態や不愉快なことは忘れ去られてしまうかもしれません。そんなところで、ここで踏み止まって書き留めておいたほうがいいことが、各自にはいくつかあることでしょう。私は渦中にあったともなかったとも言えるのですが、やはりいくつかの言葉が大いに気になりました。キャッチフレーズと言ってもいい、自粛／巣籠り、不要不急、3密、これらを接続させた使用はその代表でしょう。為政者が言葉（表象）を投げかけて呼びかけ、マスメディアが流通・拡散させ、人々が受容（消費）し自己点検・検閲してアイデンティティを構成していく、そして為政者やマスメディアが規制・検閲・コントロールし、再生産されて（やがて沈潜／消滅して）いくといった循環した構図を描くことができるでしょう。これは単に垂直的な権力作用ではなく、水平的な権力作用

も介在した複合的な権力作用、あるいは文化展開プロセスだと想定できるでしょう。

自粛／巣籠り、不要不急、3密について話してみようかと思いますが、議論の粗筋はおおよそ想像つくことでしょう。ここでは、人々、かなり曖昧な言い方ですが、あまり議論を複雑にしないで、ごくありきたりの生活者（1%を除いた99%でもいいが、とりあえず私自身を中心に想定）の動向をゾンビ的存在と絡ませてみてみましょう。

自粛というと昭和天皇の瀕死・死去の際の歌舞音曲停止を思い起こします。これも強制・義務ではなく、要請でした。だが、マスメディアを通じて繰り返されられると、次第に強制の色彩が色濃くなりました。今回のコロナ禍でも同じでしたが、自粛警察なるものがいかめしく登場しました。飲食店の店舗に張り紙をしたり、SNSに現われたりしました。実害があったかどうかは解りません。だが、恐怖をにじませた脅迫する言葉をとまなわせて、確実に陰險・狡猾な監視体制がいつもたやすく生み出されました。クラスターを発生させた飲食店やライブハウスなどは槍玉にあげられ攻撃対象になり、弾劾・排除されていきました。M・フーコーの監視社会・生政治論が参照されたり、関東大震災の自警団を想起させたりしました。危機の言葉は言葉の危機を露にし、危機の社会を浮き彫りにしていったと言えるでしょう。

このようななかで、自粛は巣籠りと言いつけられ、いわば自己点検（自己検閲）して納得（自己規律化）して受け入れられていったと言えましょう。自粛は巣籠りと

なり、要請という半命令的な強制をオブラートに包み、穏やかに自発性をともなって従順に、いくぶん誇らしげに実行されました。そこにはマスメディアによる介入が効果を発揮しました。巣籠りの写真・映像を通じた言葉（表象）の拡散が絶え間なく検閲・コントロールされながら繰り返され、突出した非常事態を受け入れ可能なものに、生活者はマスメディアに合わせて非常事態に馴致していき、平坦な非常時のなかに日常を培っていきました。

### 新総力戦体制へ

ワクチン接種は鼠をおびき出したハーメルンの笛のように、こうしたプロセスを自主的に推進する動因として実に見事に作用したと言えるでしょう。非常時を恐れるな、肉弾によって戦果を挙げよ、第一撃を開始せよ、第二撃を、さらに第三撃を、肉体をもって奉公せよ、戦果報道が日々報じられ、集会をする奴らはどこにいる、徒党を組む奴らを殲滅せよ、落伍者は誰だ、怠け者を探し出せ、臆病者を懲らしめよ、と呼びかけられました。それほど出歩きもせず、人と接触もしない、不要不急の高齢者がまず初めにワクチン接種の対象になったのは、人体実験あるいは選挙対策だったのだろうか、とても高齢者の延命に配慮したとは思えません。ワクチン接種体が良民、不／非ワクチン接種体が非国民として、不可視であるため疑心暗鬼ながら識別され、差別体制が構築されていきます。自己責任を担い、生に向かう身体の栄誉が称えられ、自己責任を放棄する死に向かう身体が唾棄され排

除されます。敵か味方か、これだけで人の判別は事足りるということになるでしょう。二度目の摂取で高熱を発して二晩寝た、と高齢の我が隣人は誇らしげに語ってくれました。

こうしてみると、比喩的だが、コロナ禍が戦争の喩えで語られたように、国内での内戦を通じた世界的な総力戦体制の構築・発動だったのではないかと思われるのです。軍事・警察力路線も関わってはいようが、それが中心ではなく、医事力路線を前面に突出させ、人的な資源も含めて、医療を中心とする経済的な資源を効率的に、犠牲を厭わずに促進させつつ動員するシステムが、いわばグローバルに始動していったと言えましょう。コロナワクチン生産・供給体制が世界を分割し、対抗的な競合・対立を生じさせ、ここでも敵か味方かの攻撃的な二分法があいも変わらずに繰り返されました。中国圏と米国圏がそれです。米国では1945年以降の戦争による死者よりも多く亡くなり、米国と中国のコロナ死者（『朝日新聞』によると、71万0178／4849・日本は1万7833：10月8日現在；73万1265／4849・日本は1万8166：10月21日現在）を比べて、米国は中国に負けているとはしゃいでいる人もいます。中国のコロナ死者数は全く増加がなく、奇妙で不思議です。粗雑な思いつきにすぎませんが、医事をコアとした新総力戦体制、誰しものが服従せざるをえないという点で、強制的な均質化と選別化の言説・実践のシステム、イデオロギーが隠然と、あるいは半ば公然と、生活者の心性や意識内に培われていったのでは

ないでしょうか。

### 不要不急の徒とは誰か

緊急事態で叫ばれる言説・実践のシステム、イデオロギー、端的には危機の言葉の最たるものは不要不急であろう。不要不急を避けよ、3密を避けよ、自粛せよ、と命令口調で要請しました。出歩くな、集まるな、話をするな、歩き回るな、短いフレーズ、切り詰められた言葉でせき立てるかのようになり、せわしない言葉がいろんな所に現われました。そして、人々は不要不急についてあまり吟味することなく、自己点検・検閲をしてコントロールしました。ほとんどの人々は不平不満を言わず、見事なほど従順でした。不要不急の徒ではないと自足する人もいれば、それに思い悩む人も現われました。必要有用とは何かはほとんど問われませんでした。

緊急ばかりを要請したとは思われませんが、不急と緊急の間にあるのは何かも問われませんでした。普段・通常だろうか、恐らくそうではありません。とすると、何だろうか、解らない。ただ不要不急、また不要無用の徒はあってもいいのではなく、それこそが人の生ではないか、へたに意味づけても仕方ない。不要不急の徒は恥らうことはない、それは俺たちのことだと居直ってみることもできたはずです。

言葉の空疎化、どのようにでも恣意的に意味づけることのできる言葉の零度化、言葉の危機に瀕しているという事態です。為政者・マスメディア・生活者の言葉は噛み合わず、議論が成り立ちません。前二者は

言葉を垂れ流すだけで、横柄かつ傲慢で聴く耳を持ちません。生活者は思い悩みます。俺は不要不急ばかりしているのか、何をすればいいのか、何もしないのがいいのか、俺は不要不急の徒なのだと妙に納得して落ち込んでしまいます。そうすると、食っていけなくなるのではないかと悩みはいや増してきます。アーティストと自称する人がこうした悩みを抱えたようです。

幅広く使いますが、アートは不要不急なのかという自問、もしくは問いかけがありました。世間ではそうみなしているはずだと、いわばアイデンティティが揺らぎ、居場所がなくなったように感じたのでしょうか。必要有用だと言い張りたかったが、普段、肩身の狭い思いをしているせいか、自分には必要有用だとは言えずに、呟いた程度だったようです。不要不急の徒で上等、と居直った人はあまりいなかったようです。

不要不急の徒というスティグマを自ら担う戦術、自己スティグマ化です。侮蔑・排除の対象として自ら名乗ることによって、その言葉は誰が誰に向けて発しているのか、その意味・意図は何なのか、さらに非常事態なるものをどのように設定して、どのようなアジェンダを構想して押し付けようとしているのかといったことが見えてくるかもしれません。不要不急の徒こそ、意義があると思ひ込んだなら、世界は一変する、少なくとも周りの光景がこれまでとは違って見えるでしょう。

DJなんか不要不急の徒の最たるものです、それでもこうして眼に見えない誰かに

話しかけているだけで、妄想だと言われるかもしれませんが、ハーメルンの笛のような言葉、危機を煽る言葉に対して少しは敏感になり、言葉が危機に瀕していると言葉を尊重するようになります。そこらへんの凡俗・凡庸な政治家の言葉は頹廢した退屈な言葉として聞えてきます。あいつらの言葉は危機に瀕していることは疑いようありません。だが、あの人たちが思い込んでいる必要有用体制、人を人的資源として動員して牛耳り、不要不急の徒を黙らせて追放します、いないものとして黙殺します。そう、現在、この不要不急の徒、そして不要無用の徒こそ、ゾンビ的存在なのです。

### ゾンビ的存在へ向かう

ここでようやく私のテーマのゾンビと繋がってきます。自粛／巣籠りを受け入れた生活者は、我知らずにゾンビ的存在を強いられ、他方で自ら進んでゾンビ的存在となったとも言うことができるでしょう。自粛は要請されたにすぎないが、権力に迎合するようで嫌だ、巣籠りなら、巣に問題のある人もいるだろうが、穏やかで自発的なニュアンスがあって受け入れやすかったのだろう。

自分や他者の相互監視・監視がすんなりと楽しげに受け入れられた光景がテレビには映し出されました。何を勘違いしたのか、前々首相は誰かの動画をパクって流用し、ただ乗りして投稿しました。ただ乗りで思い出しましたが、このことをかつて薩摩守〔さつまのかみ〕と言いました。平家の薩摩守平忠度〔ただのり〕が語源です。「さ

ざなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな」の歌が藤原俊成撰『千載和歌集』に、平氏であったため「よみ人知らず」で収められています。

少し話がそれましたが、前々首相は私も巣籠りというところで、便所の便座のようなものに坐って、ギターの弾き語りをしている動画を流し、自粛／巣籠りの範を垂れたつもりなのでしょう。私もゾンビなのですよと、ぎこちなくにやけて連帯しようとしたが、大方の輦轡を買い、啞然とされ馬鹿にされておしまいになったようです。誰かに作らせたのだろうが、感覚が古く、セコイと一笑／多笑に付され、糞味噌に罵られて、笑い者になって便壺に捨てられてしまいました。あれは電通／博報堂あたりが税金で作ったかと思うと、何だか情けなくなってしまいます。

思い出しましたが、安倍内閣は国民へ一律10万円を配りました。これについてある新聞がある人（Rとします）に聞いたことをまとめた記事（2020年5月28日付）が載せられていました。Rは日本社会では集団のなかに個人が埋もれ、情緒的な一体感を基盤とし、空気や忖度と表裏一体の「農村型コミュニティ」に傾きがちだと言います。これは外出を自粛しない人を非難する「相互監視社会」「ムラ社会」と重なるとされます。これと対照されるのが、個人が独立しながら、緩く繋がるような関係性、理念の共有や公共性を基盤とする「都市型コミュニティ」です。コロナ禍で在宅勤務やオンライン会議が増え、家族と過ごす時間を大切にしながら自分のペースで仕事をす

る動きも広まり、個人が自由に働き、多様な人生設計の可能な「都市型コミュニティ」が芽生え始めていると言います。他方では、超過密都市の感染拡大が大きく、過度の「集中型システム」の脆弱性が浮き彫りになり、「都市集中型社会」の脆さも明らかになり、これが「分散型社会」へと変わる契機なるだろうとします。ポストコロナ時代は「農村型コミュニティ」から「都市型コミュニティ」「分散型システム」への移行、過度のグローバル化からローカル化という変化が起こるだろうと予想しています。

何かしら素晴らしい社会の出現が期待されているようです。その当否は述べないが、「農村型コミュニティ」「ムラ社会」は村落から、「都市集中型社会」は社会全体から帰納されたような理念型、「都市型コミュニティ」「分散型社会」はいまだ実現されていない理念型であるような気がします。ともあれコミュニティ・社会の類型だとみなしてみると、農村と都市を思い込みによって二項対立させ、二極化した粗雑な類型にすぎないでしょう。

「集中型システム」と「分散型システム」の並存しているのが現代社会であり、Rの言う「農村型コミュニティ」「ムラ社会」が「都市型コミュニティ」に組み込まれている、入れ子式になっていると言えそうです。だが、Rの言う「農村型コミュニティ」「ムラ社会」とは何なのか、集団のなかへの個人の埋没、情緒的な一体感を基盤として、空気や忖度の支配するのが「相互監視社会」の「農村型コミュニティ」「ムラ社会」のようです。面倒な議論は省きますが、

これこそが「都市型コミュニティ」だと言えそうです。個人の独立、緩やかな関係性、理念の共有、公共性、恐らく西洋都市の理念型が念頭にあるのでしょう。「ムラ社会」は戦前のコミンテルン指導による日本共産党テーゼ以降、今でもステロタイプ化されて半封建的で遅れた社会と考えられているようです。あえてムラと片仮名で表記して差別化し、村・農村に住む人たちを貶めている、訳知り顔で浮かれている人がRをはじめとして、コロナ禍時代の文化人がたくさん登場している昨今です。

「都市型コミュニティ」に住み、不要不急の徒と名指しされ、自問・自己検閲していたアーティスト（この言葉には少々抵抗があるのですが、とりあえず使っちゃいます）や劇場・ライブハウス・映画館・美術館などの施設運営者は色々と工夫しながら、孤立のなかから連帯へと歩を進めているようです。「劇団☆新感線」の役者、古田新太は舞台を無観客配信し、「客のいない前でふざけたって面白くなくて、我々の仕事は不要不急だと思った」。だが、映画『空白』に出演した試写を見て「やっぱり面白は必要だ」と思い直し、「できれば一緒に見に行ったやつらと飲みに行っただ話してほしいですけどね」と話している（『朝日新聞』2021年9月24日夕刊）。

海老坂武はフランス語では孤立は一字を入れ替えると連帯になる（solitaire / solidaire）、これはカミュの『追放と王国』で語っていると記していました。英語（solitary / solidary）でも同じです。この海老坂の記事は1年以上前、フランス滞在

中のコロナ第一波の頃で、フランスでは難民や路上生活者への支援運動が始められ、毎晩8時になると、周囲の窓辺やテラスに人影が現われ、皆が一斉に拍手をして医療従事者などに感謝と連帯を示していたといった光景を描いていました（『朝日新聞』20年3月15日付）。孤立から連帯が生れるのでしょうか。今ではどうなのでしょう。10月現在では、ワクチン接種の義務化をめぐる抗争しているようです。この国でも飴と鞭でワクチン接種証明書を出させようとしています。

こうした連帯の諸相を見ていくと、言葉の実践とは目的と手段に切り詰められ、システム化された機能的なものではなく、危機的な状況であれ何であれ、孤立していることもあれば連繋していることもある自分の状況のなかで、自分の状況を表現して他者に伝えようとする、いわば根源的な志向性であろう。それは構想する力を発揮して、自分と他者との根底的な有り様、その未発の可能性を切り拓いていこうとする、すぐれて表象的・行動的な営みとして想像できるでしょう。とするなら、ゾンビ的存在の声にならない呻きやぎこちない振る舞いは、未成の創造的な構想力を孕んだ、極めて貴重な兆候として着目できるのではないのでしょうか。

### 呻き声に耳を澄まして

ゾンビ的存在は言葉を発せないことになっています。言葉を持っているかもしれませんが。呻き声をあげるだけです。だが、ゾンビ的存在自身としては言葉を出してい

るつもりかもしれませんが。それが聴き取られない、何としても聴き取ってほしいと思い、墓場やモルグ（死体保管所）からおぼつかない足取りで一步を踏み出し、人懐かしげに近づき迫っていきます。しかし、言葉を聴き取ってくれない、理解されない、歓迎されない、連帯は拒まれます。この絶対的と言っていいほどの断絶、ここに世間また世界の状況が反映されていると言うと、話は大袈裟になります。だが、多くの生活者がゾンビ的存在になることによって、この断絶は少しだけかもしれませんが、なくなっていったような気がします。

感染者の増大にともない、「自宅療養」という言葉で自宅待機を強いられたことに対して、それは入院拒否をすり替えた言葉にすぎない、患者を切り捨てるのかと声があがりました。政府はワクチン摂取者の数値だけを声高に叫び、自宅療養の患者や医療従事者の過度の労働には目もくれず、医療的な弱者を見殺しするのを厭いませんでした。実際、自宅療養者がバタバタと亡くなりました。妊娠した女性が自宅療養中に、入院先が見つからずに自宅で出産し、赤ん坊が亡くなっています。

この女性は不要不急の徒だったのか、自宅療養という名／言葉のもとでゾンビ的存在として放置されて遺棄されました。不要不急の徒は見捨てられてもかまわない弱者だとして処遇されたのです。こうした医療から見捨てられ、社会からまた政治からも排除された人々の姿が露になってきたのではないのでしょうか。誰かが喩えていましたが、氷山の一角の下、海中に隠れた巨大な

氷塊、それが政治から排除された圧倒的な(99%の?) 社会的な弱者といえるでしょう。それこそが不要不急の徒、そう、またの名はスティグマを負ったゾンビ的存在だと言えるでしょう。

確かにコロナ禍はこうした社会的な弱者の存在を浮き彫りにしました。だが、大方の生活者は強者ではないにしても、弱者だとは思いもよりません。大雑把にマジョリティだと想っていることでしょう。知っている人はほとんどいないでしょうが、かつて本田路津子〔るつこ〕は「耳をすましてごらん」と歌っていました。「遙かな海のとどろき」のなかに、かほそい声や言葉が聴こえるかもしれません。拡散し散乱する言葉を聞き分けるには大変な注意力を要するでしょう。威勢のいい言葉には踏み止まって、ささやかな言葉にこそ耳を傾けるほうがいい、昨今ではないでしょうか。

ゾンビ的存在は不要不急のどうでもいい、うなり声をあげて、必要有用の人々に迫ります。それが群れなすと海鳴りのようになり、言葉にならない轟きで必要有用を問い、ほとんどすべてのことが不要不急ではないか、ゾンビ的存在にならないか、不要不急の徒になると楽だぞ、と仲間を求めてうごめいているのかもしれませんが。

肉体の脆さを露にして晒している、戦争や死闘の真只中にあるわけではなく、何ものかに狙われている、追われているといった感覚が肉体を襲っている。他方では、脆い肉体を抱えて、新たな脆い肉体に繋がることを希求しようとしている、本能の赴くままに動きまわる、跳躍していく。弱くて、

哀れで、せつないのだが、孤立しても、自由で気ままな状況を生み出していくのが、こうしたゾンビ的存在だ。だが、肉体の強健さを誇示して脆弱さを隠蔽し、あるいは自覚もせずに、軟弱な奴らは切り捨て、忌み嫌って隔たりをもつ、業績・自己責任をモットーにして他人に押し付け、人的資源だとおだてて、倒れてしまうと自己責任だとうそぶき、ゾンビ的存在を酷使して愚弄する、衛生に溢れた清潔な非ゾンビ的情况を構築しているのが、非ゾンビ的存在だろう。役立たずの不潔な不要不急の徒よ、奮起して怠けよ、これが不要不急の徒、さらには不要無用の徒のひそやかなスローガンとなるでしょうか。次に、MFE 創刊号から、いくつか見て見ましょう。

### 不要不急の徒／ゾンビ的存在の居場所

シム・アジョン「性-種-資本-軍事主義の共謀と動物の居場所」、ジョージ・オーウェルの『動物農園』や宮沢賢治の『注文の多い料理店』を思い出しました。こちらは動物の逆襲です。シムは工場式畜産について記しています。これを人に当てはめれば、カズオ・イシグロの『わたしを離さないで』に描かれた、臓器移植のためのクローン製造に繋がっていくかもしれません。「時間と空間の監獄の中」に生死を管理され、人の食べ物になるシステム、豚は6ヶ月、鶏は1ヶ月ほど、時空間性を全面的に剝奪されます。これまでの時を背負った後ろ姿がなきものにされる生涯、ゾンビ的存在の居場所とはこのようなものかと思われま



鶏や豚、牛などの家畜が感染症に罹った場合、殺処分という言葉で大量に殺されて土中に埋められる。感染していない者も見逃されず、文字通りジェノサイド・大量殺戮です。必要有用の徒から一転して、不要無用の徒へと陥落させられたわけです。どうしてすべて殺すのか、小規模経営者は破産するのではないかと、テレビで見て思ってしまう。これは「不自然な、工場式畜産だが、自然・在来種を守るためにも、侵略種・侵入外来種・生態系攪乱生物に対しても、同じようなことが行なわれていることをシムは物静かに記しています。

侵略種とはまさしく初めから殲滅対象となる不要不急の徒というよりも、不要無用の徒ゾンビ的存在のことであり、容赦のない永久的・全面的な戦争状態となります。さらには、アフリカ豚熱が流行した際には、感染の有無にかかわらず、野生猪と飼育豚に対する、合法的な予防的殺害が蔓延しました。そして、先制対応という軍事用語を用いた、動物に対する「保安処分」が横行していきます。ヌートリアや野犬、韓牛（ハヌについては、竹国友康『日本を生きた朝鮮牛の近代史』有志舎、2021年、参照）、そして輸入飼料穀物依存型畜産・密集飼育型畜産の工場式畜産の話は、気の滅入る暗澹たるものですが、教えられるところが多々ありました。ロナルド・L・サンドラー『食物倫理（フード・エシックス）入門—食べることの倫理学』（馬淵浩二訳、ナカニシヤ出版、2019年：Ronald L. Sandler, Food Ethics : The Basics, Routledge, 2015）を訳者の馬淵さんから贈られていたことを

思い出しました。ここでは、集中家畜飼育施設についてもあげられています。また、生田武志の『いのちへの礼儀—国家・資本・家族の変容と動物たち』（筑摩書房、2019年）もあげておきます。

「効率的な生産環境を保つために、飼育の便宜のためにしっぽを切られ、歯を抜かれ、去勢された」豚たち、間近な死と背中合わせの監禁施設で移住労働者とともに、はかない生を全うする、それはハイチの元祖ゾンビのようです。最近、ゾラ・ニール・ハーストン『ヴードゥーの神々—ジャマイカ、ハイチ紀行』（常田景子訳、ちくま学芸文庫、2021年）を読みました。ヴードゥーの呪術によって、死者は生き返ってゾンビになり、奴隷、召使い、泥棒などとしてこき使われたり、プランテーション農場のバナナ畑などで酷使されたりします。「前世の記憶も持たずに、疲れることを知らずに激しく働く」。帝国主義や資本主義はゾンビを生産する、あるいは人をゾンビにするということでしょうか。食費は不要、無償の労働だけという極めて便利な存在として創出されたわけです。

「ゾンビは、魂のない肉体だ。生きている死者だ。彼らは、いったん死に、そのあと再び生に呼び戻される」。路上で発見され、病院に収容された女性の「本物、のゾンビは「虐待や暴力を受けることを予期して怯えているらしい兆候を示すばかりだ」。ハーストンは写真を撮る。「それは恐ろしい眺めだった。表情のない顔に死んだ目。目の周りじゅうが、酸で焼かれたように白くなっている」「生きる屍はとても長く見

ていられるものではなかった」。何やら現代人の様相の一つを映し出しているようです。思い当たる節が多々あることでしょう。しかし、ハイチ・ゾンビのこうした原型的なイメージはやがて払拭されて変容していきます。現状の鏡像ともいえる映画で、ゾンビは成長していきます。それはゾンビ映画の第一人者の名にちなんで、「ロメロ的展開」と呼べるでしょう。そこでは、原型的ゾンビを揺曳させつつ、現代人の深層を一層露に浮き彫りにして、現代社会の苦境をリアルにもしくは戯画的に表象しているようです。

必要有用のために搾取されながらも、排除・駆逐・殺戮される未来を担う／担わせられる、動植物や人という生き物には立つ瀬がないのか、なくはありません。シムは「侵入種」に関連させて述べています。その不気味な嫌悪される不確定性に満ちた存在は、バランスの取れた自然・社会のシステムや予定された未来に対して、あらためて問い返し、根本的に違反／背馳している「反逆的な主体」として解釈されて新たに出現する可能性を帯びているとして、実践のプロセスへと推し進めなければならないということになります。これはゾンビ的存在に言い換えることができるでしょう。

### 夜の街でゾンビは踊るか

黛友明「夜の街」と想像力」、夜の街」こそ、ゾンビ的存在の居場所だと思ったりします。夜の街を跳梁するのはドラキュラだが、ゾンビも夜の街とは親密です。やはり墓場を起点にしているところから、夜と

か闇とかが居場所だが、街のなかへ群れなして繰り出していきます。どのような人たちで構成されるのかは不明瞭なのですが、「夜の街」の人々もゾンビ的存在、すなわち不要不急の徒とみなされたわけです。これは蔑みの貶める言葉としてステイグマになったことは疑いありません。非常識という言葉も発せられました。いわゆる上から目線ですか。私も幾度か非常識に奈良の夜の街に繰り出しました。しんみりとしたものでした。

たそがれ時・逢魔が時から丑三つ、黎明・しのめ（東雲）、こんな時に歩いて酒を飲んで騒いでいるのは、不要不急の徒に他ならない。まさしく夜／闇での密閉性・密集性・密接性こそがその徴として糾弾されます。何を恐れているのか、黛は夜の異質性を指摘しています。昼と夜を混合させごっちゃにさせた時空、「夜の街」の異質性がそれであり、その担い手がこの世の境界をさまよう、賤民とされた宗教的芸能民だと、さらに展開されます。昼夜の不分明な煌々とした「夜の街」で、魔物が跳梁する、襲いかかる、踊り狂う、ゾンビが来たりて笛を吹く、というわけです。マイケル・ジャクソンのスリラーです。昼の普通の人々が誘惑されて、あるいは羽目を外して、夜の異人に化身すること、ゾンビ的存在への変身・変態が恐れられているということもできるでしょう。アナーキーに踊り狂えということになります。

昼夜の混交・混乱、そこに集う人々の解放感を抱かせる、反秩序的・頹廢的とされる都市の徴でもあります。そこから、黛は

市村弘正（『「名づけ」の精神史』平凡社、1996年）を踏まえて、都市周縁性、そして遊行・漂泊に着目しています。ゾンビ的存在との親縁さがうかがわれます。他方、遊行・漂泊は永久運動ではなく、定住・土着がその背後で支えています。当初、定住・土着は自発的であり、一時的だったかもしれませんが、近代社会・資本主義の発展にともない、それは強制的になり、自明視されるようになりました。黨がイヴァン・イリイチを援用して言うように、賃労働とシャドウ・ワークの成立とともに、遊行・漂泊は壊滅させられ、いわば男は工場・会社、女は家・家庭に隔離されることになります。

そこで、黨は「夜の街」へ戻り、それは「言葉の政治力学を駆使した昼と夜との隔離体制の強化」という象徴操作の戦略だったと、まっとうに論じています。出口なしの議論になってしまったかもしれませんが、そんなことはないでしょう。「夜の街」などといった俗受けする言葉を批判・解体する路線はどこかにあるでしょう。

黨は「断捨離」を反論の余地ない良き事とするような社会は自傷行為を推奨しているようなものだと言います。断捨離という言葉には、捨てる物を多く持っているとする自負と傲慢が透けて見えます。断捨離などはなから無用な者もいることを知ろうとにしない、嫌な奴らです。それにそのかさされている者も嫌な奴かもしれませんが、情けないのではないのでしょうか。断捨離の対極にあるのはゴミ屋敷か、これは人を蔑んだ言葉だ、ゴミ小屋とは言えないので、

こうした表現になったのでしょうか。ゴミ屋敷・ゴミ小屋、上等と言いつしかありません。断捨離の徒は、猫でもいいのですが、人を含めた生き物や物との繋がりを持たずに、自尊心だけを膨らましていくとしか言いようがありません。

ゴミ屋敷は都市に出現した異界、都市に亀裂を入れた周縁、隔離体制のど真ん中に「悪所」を設けて風穴を開けているとも言えるのではないのでしょうか。その屋内や庭・敷地には猫や犬、鼠やゴキブリ、蜘蛛やヤモリ、蚊や蠅、鳥や蝶などが、動き回り、這い回り、飛び回り、草木が生い茂り、賑やかなことでしょう。それらに囲まれた高齢者であれ、生活者は至極豊かなのではないのでしょうか。ゴミ屋敷は隔離・監視体制へ向けた、対抗戦略なのではないのでしょうか。ゴミは臭いかもしれませんが、それに囲まれて安堵する人もいるのであり、生の軌跡を刻み込んだ多種多様な物たちは過剰ではあれ、稀少財であり、ゴミ屋敷は見直してみるに値するかもしれません。

このようなところから「夜の街」のステイグマ化に抗するには、ステイグマの解体、もしくは自己ステイグマ化が方途として導き出されます。「夜の街」というステイグマを引き受けることによって、少なくとも個人的にはステイグマをたやすく解体できます。それが不要不急の徒、もしくは不要無用の徒、都市の周縁を遊民として遊行・漂泊してさまよい、踊り戯れることに快感を懐けるなら、何よりのことではないのでしょうか。ゾンビ的存在の本領もこんなところにあるのではないのでしょうか。

南宋の范成大の「四時田園雜興六十首」のうち「秋日 其七」をあげてみます。「中秋の全景 潜夫に属す／棹は空明に入りて太湖を看る／身外の水天 銀一色／城中に此の月明有るや無しや」。中秋のすべての景色は隠者のもの、透き通る光のなかに棹を差し入れ、太湖を見る、我が身の外は天も水も銀一色、街のなかにこの月明かりはあろうか。范成大は官職を辞した後、田園に隠遁した人です。周縁に位置して、不要不急の徒たる隠者の生活を満喫し、都市には月明かりは見られない、名利を求める有象無象の徒がいるだけだ、都市を離れた地の遊歴こそ望外の幸いではなからうか。

### 自己検閲から連動する読み書きへ

査読という言葉は『広辞苑』には載っていませんでした。アカデミックな世界の特殊な用語なのだとあらためて知りました。査読は査問をやや連想させ、感じのいい言葉ではありませんが、査は調べるという意味であり、調べつつ読むというところでしょう。富山一郎は「読むということは体感なのだ」と記していますが、そこから触発されて始めてみましょう。かつてのように筆で書くわけではないのですが、私の場合、パソコンのキーをぎこちなく緩やかに打っている時も、途切れ途切れながら、リズムのある体感めいたものを感じながら書いているのだらう。私は数冊の本を広げて見たり、少し考えたりしながら書いているのだが、たびたび停止します。休息もありますが、キーを打つ指が止まり、前の文を眺めることになります。前後の文脈に合わ

せて検討し修正することになります。それは自己検閲と言っていいかもしれません。

準備号で永岡崇は「強迫的にオリジナリティを追求する」ような「自己検閲の感覚」に囚われず、ありふれている問いや思考を差し出し、そこから共振や違和を生み出して「集団的なオリジナリティが生成するなら、それはそれで面白い」と述べています。検閲は伏せ字と連関して、かつてなら政府、現在ならマスメディアによる強制的な削除・修正が予想され、それを忖度した表現・記述の修正・緩和化が想定されているように考えられます。私も天皇制・皇族に関して書く時、また知り合いの人のものを論ずる場合には少し構えてしまいます。だが、自己検閲、自己批評・自己検討・自己批判と言い換えてもいいのですが、オリジナリティ（のようなもの）も含めて、ある種の自分なりの規範のようなものに従って、それは絶えず行なっています。こんなことを書いてもつまらない、しょうがないじゃないか、すでに誰かが言っているのではないかなどと、自問もしながら書いているのではないかと思います。

だが、こういうことはいつ頃からかあまり気にしなくなりました。予備校講師になってから、あるいは天理大に行ってからだろうか。私の場合、学会誌なるものに投稿したのは6回ほどで数少なく、一応、少しは気負って、体裁だけはつけようようとし、それらはやはり規格化された文章だったと思います。編集委員が読んだと思いますが、何らコメントもなく、すんなりと掲載されました。当時は投稿数が少なくて、査読な

どなきに等しかったのかもしれませんが。

どんな専門か、ジャンルかといったことは気にせず、何とはなく好きなことを好きなように書けばいいと、自己検閲と言えば大袈裟だが、あまり検討もせずに垂れ流してしまう、自分だけが読者になり、満足も不満足も気にしないで、緊張感のないものが出来あがります。とはいえ、書く対象・テーマとの緊張感だけは少しあります。思いついたテーマを垂れ流しに書くと、きわめて長いものになり、誰が読むのだろうかとか懸念しつつも、書きまくっていました。多くは科研報告書です。周囲の人にも勧めました。そういえば、100 / 80 枚書いて、60 / 50 枚に短くすると、緊張感のあるものになるなどと言っていたこともありました。実際には、枚数の問題ではありません。長ければ長いほど、何やら達成感めいたものが生じ、自己満足します。読者不在の文章、活字にすれば誰かが読んでくれるかもしれないという、淡い期待がなくはありません。

ここまででも全体の文章がかなり長くなっていますが、こんなことを書く人は余りいないだろうと思って続けます。この雑誌では相変わらずかもしれませんが、少し違う構えで書けるのではないかと思いました。書けば読んでくれるだろうという期待、そこで読者が念頭に現われてきます。そして、この雑誌に集まるであろう人、書く人、読む人を何とはなしにある程度想定して書き、文やら内容やらを自己批評／検閲しつつ、修正していくことになります。ここで私は「です・ます」調で書いていますが、

それは丁寧文を心掛けたわけではなく、誰かに呼びかけ、誰かを相手にしながら書いているつもりです。創刊号ではあえて読者のお便り・コメントをでっち上げてみました。誰かが読んでくれたなら、何やら楽しい。あとは読者に任せるしかありません。誰でも応答を期待して待っていよう。完結することなく、「つづき」を期待する、応答を求めて孤立を恐れず、というところでしょうか。ある文章を媒介にして、再記・再読をうながし、批評・批判をうながすような、連動した態勢をとり、循環する連帯の環を拡張していくような雰囲気は貴重なのではないかと考えています。

まだしのめには間がありますが、ミージャのファドは終わってしまいました。それでは名残りは尽きませんが、また会う日まで。

## 後の宴

10月23日、オンラインが行なわれました。ほぼ3時間、なかなかのものです。私は音量調節ができなくて、聴き取ることが困難でした。それでも色々な人の顔を見ることができ、楽しいひと時でした。力を籠めた小島の言葉には少なからずたじろぎました。この国には書評誌がない、新聞の書評など書評と言えるしろものではない、論争の伝統がないのだ、などなど。

私は2001年4月から2003年3月まで、朝日新聞書評委員をしていました。新刊書はかなり読み、かなり書きました。この2年間ほど、多くの本を通して読んだことはありませんでした。次数は800字弱、短く

するのに極めて苦勞しました。選ぶ本は自分ができそうで面白そうなもので、労作だ、本書は未来の読者にも読み継がれるだろう、本書は読者を開かれた未来へといざなうだろうなどと書いたかもしれませんが。残念ながら、私の書いたものはパソコンには残ってはず、切り抜きも行方不明です。それなりにいい本だったため、批判めいたことを書いたことは一度もありません。どこか違うとか、違和感めいたことを懐いたはずだが、それを記そうとすると、字数に収まりきれない、本の紹介程度いいのだと思っていたかもしれません。一冊の本と対峙・対決しようとする姿勢はない、それどころか提灯持ち記事になっていたかと、今では考えています。

論争を避け、無難無事にやり過ごそうとする雰囲気、それは私にも大いにあるようです。嫌な奴のものは無視し、この世にいない人のものはケチを付けるという狭量さ、もしくはセコさでしょう。私の書いたものでも、批判めいたことを書かれたことは幾度かあります。それは反論する機会もないので、ほとんど無視します。

そういえば、ある雑誌である人の柳田国男を論じた本を批判したことがありました。そこでは書評に対する反論も載せられます。私は本文に対してまともな批判をし、また掲載された写真に何らコメントがないことに対して、写真は単なる飾りなのかといったことを書きました。だが、著者は瑣末なことしか述べていないと、かなり憤った反論を書いてきました。それに対する私の反論は書く機会がありませんでした

が、著者はケチ付けにすぎないと思ったのでしょうか。当時、写真やその使用法にこだわっていて、著者自身の撮ったものではないにしても、本文と連関させて説明をするのがいわば常識、ごく普通のことだと思ったわけです。だが、私の思っていたのは常識ではなかったようです。今思うに、柳田派と反柳田派の論争になったかもしれません。

また、セクシュアルな民俗行事を述べた掲載論文のコメントを求められたことがありました。こうしたことをテーマにするのは素晴らしいと、持ち上げたものを書こうとしましたが、読んでいくうちに私にすればかなり杜撰なものだと思い、かなり詳しく長々と批判しました。これに対しては著者から何ら応答がありませんでした。著者がどのように読んだのかが全く解らず、少なからず徒勞だったと思いました。

私は論争めいたものをできるだけ避けて、アドバイスのようなものにしようと考えてきたわけですが、自分の書いたものに何かしら因縁をつけられると、いわば自尊心を傷つけられたとってしまうようで、残念ながら、私の数少ない経験でも、論争のようなものはなかなか起こりにくいようです。批判・反論・相互検討のような連鎖はどのようにして出来上がるのでしょうか。やはり狭量では駄目で、誤りや不足、不十分を認め、他者の言葉に耳を傾けて、議論を弁証法的に深化させていくことができると予期して待機しているような、それなりの度量を持っていないと無理なのでしょう。

それから、これも付け加えですが、私のような不要不急の徒・ゾンビ的存在にしてみれば、居籠りはやや常態ですが、少数派であり、群れたがる反3密派です。文化庁の国語世論調査で、「不要不急」「3密」「ステイホーム」などは6割以上が「そのまま使うのがいい」だったそうです（『毎日新聞』21年9月25日）。会合・集会・デモ・宴会は敬遠され、家のなかでの閉じ籠りをよしとする、社会が推奨されているようです。オンライン合評会、韓国、米国、日本といったインターナショナルがささやかにではあれ実現され、互いの面立ちを眺めることができ、これはこれでいいのではないかと思います。有象無象が群れなすなかに未知との遭遇もあるかと思えます。長くなりそうなのでこれでやめますが、10・23総括とまではいかない、印象記です。（つづく）

（かわむら くにみつ 文筆業）